



1190

講談社現代新書

子守り唄の



五木の子守唄をめぐる精神史

誕生

赤坂憲雄

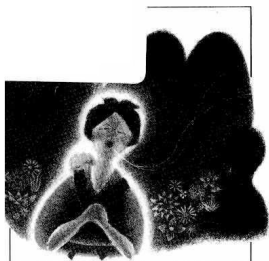
日本の子守り唄はなぜ暗いのか。重く湿った匂いはいどいから来るのか。近代の闇の底から聴こえてくる、数も知れぬ守り子たちの
の呟きの唄を解読し、忘れられた精神史の風景を掘り起こす。

文化人類学・民俗学

- 152 文化人類学の考え方——米山俊直
 255 文化人類学——C・クラックホーン
 255 の世界——外山・金丸訳
 476 「遊び」の文化人類学——青柳まちこ
 816 動作——都市空間の行動学——香原志勢
- ★
- 420 日本神話の源流——吉田敦彦
 664 日本の神々——平野仁啓
 675 日本人の死生観——吉野裕子
- ★
- 615 アメリカン・スピリット——坂下昇
 115 アメリカ人——加藤秀俊
 911 不思議の国アメリカ——松尾式之
 943 黄金の五〇年代アメリカ——海野弘
 496 イギリス人と——P・ミルワード
 496 日本人——別宮貞徳訳
 629 イスラムからの発想——大島直政
 718 ビバ！メキシコ——田辺厚子
 834 ユダヤ人——上田和夫
 845 中東を読む——キイワード——浅井信雄

日本人論・日本文化論

- 105 タテ社会の人間関係——中根千枝
 500 タテ社会の力学——中根千枝
 300 適応の条件——中根千枝
 293 日本人の意識構造——会田雄次
 258 日本人の論理構造——板坂元
 275 好奇心と日本人——鶴見和子
 320 日本人の行動様式——荒木博之
 560 ユニークな——G・クラック
 560 日本人——聞き手——竹村健一
 387 日本人の周辺——加藤秀俊
 728 パチンコと日本人——加藤秀俊
 378 たべものと日本人——河野友美
 937 カレーライスと日本人——森枝卓士
 653 私のニッポン日記——E・G・サイアレンスツェック
 653 私——安西徹雄訳



子守り唄の誕生

五木の子守唄
めぐる精神史

赤坂憲雄

講談社現代新書

はじめに

子守り唄のある風景は、きまって甘やかな郷愁を漂わせている。子守り唄など聴いたことのない者らの耳にも、それはどこにあるとも知れぬ故郷のイメージとひとつになり、そこはかとなき感傷の淵へと誘^{いざな}いかける呪文のような旋律と化して、心地よく響く。それはまた、誰しもがくぐり抜けてきた、しかし、永遠に失われた幼年期のはるかな記憶に意識することのないままに重ねられ、さらに深い郷愁を掻き立てることになる。

たとえば、「赤とんぼ」(三木露風作詞・山田耕筰作曲)に歌われた懐かしい風景の向こう側からも、かすかな子守り唄のメロディが聴こえてくる。

夕焼け小焼けの赤とんぼ

負われて見たのはいつの日か

山のはたけの桑の実を

小かごにつんだはまぼろしか

子守りのネエヤの背に負われながら見た、暮れなずむ茜色の空のしたを飛びかう赤トンボの群れ、そして、ネエヤが山の畑で背中の中の自分をあやしつつ、小籠に摘んでくれた桑の実……。この童謡を耳にしたり口ずさむ者はおそらく、それがいつか自分の見た幼き日の原風景であるかのように、知らぬ間に錯覚する。かぎりなく牧歌的な、抒情詩のひとかけらにも似た情景には、人を酔わせるものがある。

十五でねえやは嫁にゆき

お里のたよりもたえはてた

そのネエヤは十五歳で嫁にゆき、やがて里の便りも絶え、消息も知れぬ遠い人となる。ネエヤはどこに行ったのか。そして、ネエヤの記憶のなかに、この夕暮れの子守りの情景は、いったいどんな思い出として残されたのか。ネエヤとは誰か。ネエヤはどんな旋律に乗せて、どんな子守り唄を歌ったのか。はたしてその唄は、赤子^{あかご}へのやさしい愛を籠めて歌われたか。懐かしい黄昏の子守り唄のある風景の底に、まるで陰画のように沈められたネエヤのうしろ姿に、ふと眼を凝らしてみたい気がする。

ネエヤは子守りの少女である。どこか、よその村から子守り奉公に雇われてきた、十歳

をいくらか越えたばかりの少女であらうか。子守りはたいてい少女の仕事であつたが、その子守り娘にもいくつかの種類があつた。幼い弟や妹を親に言いつけられて背負う場合、同じ村内^{むらうち}で互いに助け合う目的をもつて子守りをさせられる場合、そして、よその村の農家や町の商家に子守り奉公に出される場合である。第三の場合は、もっぱら貧しい農家が口減らしのために、七、八歳から十二、三歳ぐらいの娘を、比較的裕福な家に年季をかぎつて住み込み奉公させたものだ。「赤とんぼ」に歌われたネエヤはたぶん、この、他郷へと奉公に出された、第三の子守り娘の群れのなかの一人であつたはずだ。

子守り唄について語るためには、すでに近代という時間^{とき}の水底^{みなそこ}に没してしまつた数も知れぬネエヤの姿に、その俯きがちなうしろ姿に、とりわけ眼を凝らさねばならない。子守り唄それ自体は、いつの時代にも、どの民族のなかにも見いだされるものだ。しかし、どうやら日本に固有と思われる、ある一群の子守り唄が存在する。子守り唄にもいくつかの種類がある。寝させ唄、遊ばせ唄、そして、子守り娘の唄である。この、第三の、子守りの少女らの自己慰安のモノローグともいふべき子守り唄は、じつは欧米には存在しない。そこには「赤とんぼ」のネエヤがいなかつたからだ。

日本の子守り唄には、暗く湿つた印象がつきまとう。母親がゆり籠を静かに揺すりながら、囁くように赤子に歌いかける子守り唄とは、およそ肌合いを異にした世界が、そこに

は広く、深く沈澱している。聴こえてくるのは、母親のやわらかな愛といつくしみの声ではない。無数のネエヤたちの、たとえば哀しみと怒りと憎しみにまみれた、呟くような幽かに響きあう声である。ネエヤの存在こそが、日本の子守り唄に固有の彩りを添えた。ネエヤなしには、日本の子守り唄そのものが存在しない。

あらためて、ネエヤとは誰か、ネエヤの歌う子守り唄とは何か。ネエヤと、その子守り唄の発生から衰滅へといたる歴史を辿る、ささやかな旅を始めることにしよう。それが、日本の近代を通底する精神的な風景のひとつを掘る道行きでもあることは、いずれ明らかになるだろう。ネエヤの子守り唄の精神史へ。

目次

はじめに 3

第一章 守り子唄への道

11

子守りという労働のはじまり／守り子、そして守り子唄の誕生／七七七五調の
守り子唄／鬼っ子と正嫡のはざまに／守り子という資本主義の子ども／守り子
唄はどこからやって来たか／群れの文芸としての守り子唄／守り子唄のある風
景から

第二章 五木の子守唄とは何か

39

「五木の子守唄」の向こう側へ／守り子唄から五木の子守唄へ／流離してゆく

守り子唄／ナゴの娘たちの抵抗の唄／被差別の民と守り子のあいだに

第三章 守り子たちの日々

守り子唄という身辺雑記／山里にいる守り子たち／ひそやかな憎しみと殺意／
抗いと諦めのあわいに／年季奉公としての子守り／群れをつくる守り子たち／
守り子たちの恋と性／諷刺文学としての守り子唄

第四章 流れものの譜

親のない守り子の墓／ナガレモンとしての守り子／勸進をめぐる歴史の黄昏に／
門付けして歩く人々／はるかな守り子唄の極北へ／隠れ念仏と勸進聖の唄

第五章 守り子の父は誰か

守り子の父と母をたずねて／ダンナ／ナゴ制のなかの父／守り子の父は山から
山へ／川流しを父にもつ守り子／五木の渡り山師たち／木挽唄から守り子唄
へ／木おろし唄と木挽唄／唄を運んだ山師たち／紀州山師と守り子の唄

第六章 宇目の唄げんか

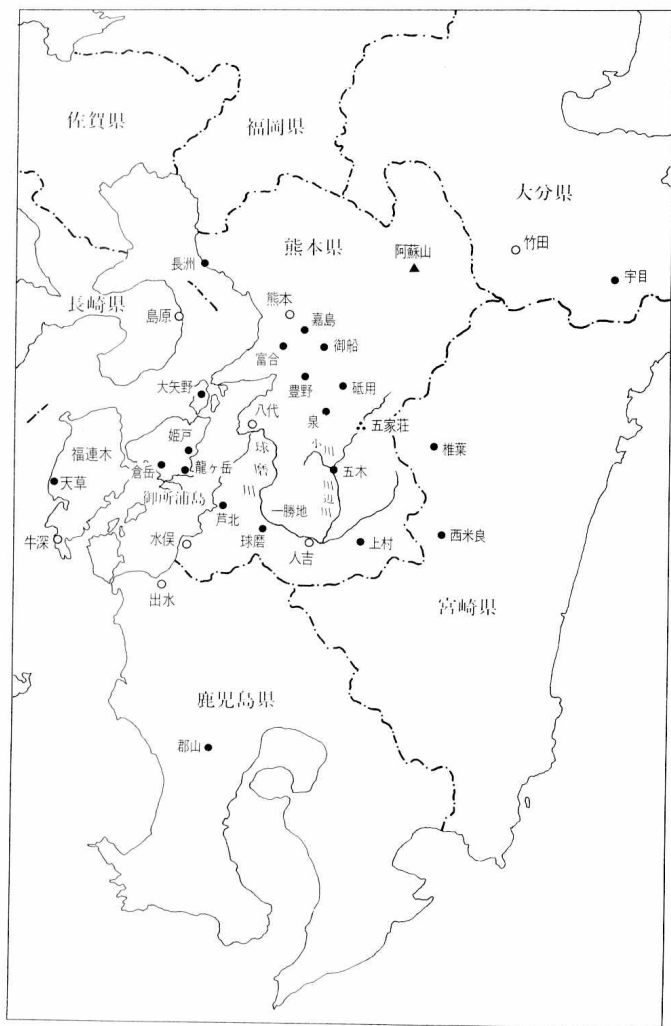
豊後山師と五木の子守唄／宇目の唄げんかとは何か／当て唄から唄げんかへ／
様式美をもった唄げんか／守り子唄の二つの極北へ

あとがき

193

参考文献

198



本書関連地図

第一章……守り子唄の道……

守りはぐいとして 破れ傘ささしや
可愛我が子に 雨かかる

子守りという労働のはじまり

赤ん坊を背負った女たちの姿は、中世のさまざまな絵画史料のなかに描かれている。母親をはじめ、乳母・老女・下女といった女たちである。畠で菜を摘む女、井戸のかたわらで足踏み洗濯をする女、店棚の前でなにか見つくりつている女、高僧の説教に耳を傾ける女、市女笠の旅ゆく女、年の暮れの市で物売りをする販女……、そうした女たちの背中には、小さな丸坊主の頭が覗いている。しかし、赤子をおぶった少女の姿はない。

中世も末に近くなつて、ようやく幼児を背負った少年・少女が登場してくる。そして、近世の絵画史料のなかでは、もはや子守りをする少年や少女の姿はありふれたものにすぎない。そこでは、年長の兄や姉らしき子どもらが、幼児をおんぶしながら遊び戯れている。むろん、依然として、子守りは大人の女たちの仕事でもあった。

中世の終わりから近世にかけての時代に、何かが起こつたらしい。

イエズス会の宣教師として、三十五年間にわたり日本で布教活動をおこなったルイス・フロイスが、その『ヨーロッパ文化と日本文化』のなかで、こんなふうに書いている。十六世紀の末のことだ。フロイスはいう、「われわれの間では普通大人の女性が赤児を首のところに抱いて連れていく。日本ではごく幼い少女が、ほとんどいつでも赤児を背に付けて行く」と。誇張はあるにせよ、この頃すでに、赤ん坊をおぶった少女の姿が珍しいもので

はなかつた様子が偲しのばれる。

子守りという労働が子どもたちに課せられる時代が、このとき始まっていたのである（黒田日出男『子どもの登場』）。とはいえ、中世以前の庶民の子どもたちが、家事や農作業といった労働から無縁な存在であつたとは考えられず、子守りが重要な子どもの仕事のひとつに数えられるようになったことを意味するのだろう。そして、ここでの子守りは家事労働の一種として、兄や姉たちに課せられたものであり、いまだ年季奉公としての子守りではなかつたと思像される。

労働というにはどこか幼い、遊びと未分化な子守りにすぎなかつた。遊びとは分かれたる労働としての子守りが、やがて、はつきりと姿を現わす。遊びながら子守りをする段階から、子守りをしながら遊ぶ段階への移行、いつてもよい。子守り奉公にしたがう娘たち、子守りやネエヤの登場である。

守り子は群れであつた。同じ境遇に生きる少女たちが群れをなすところに、奇妙な子守り唄がひそかに産声をあげた。寝させ唄でも遊ばせ唄でもない、守り子自身のモノローグにも似たその唄を、とくに守り子唄と呼んでおく。のちに触れるが、この守り子唄は群れの文芸である。群れの力こそが、守り子唄を産み育てる母胎であつた。

守り子、そして守り子唄の誕生

子守り唄の最古の記録は、十四世紀初頭の作といわれる『聖徳太子伝』巻一に見えている（岡田希雄「鎌倉時代末期の子守歌」）。しかし、それはあくまで文献史料によって確認しうるかぎりでの、もっとも古い記録ということであり、さらに古い時代の女たちが赤子を眠らせるために、子守り唄を歌わなかったとは思えない。とはいえ、文字に書き残されなかった子守り唄を知ることができない。

近世の文献のなかには、たくさんの子守り唄の歌詞らしきものが記録として残されている。その多くは寝させ唄か遊ばせ唄であり、江戸や京・大坂の都市文化の匂いを色濃く漂わせる内容である。のちには子守り娘が歌い手になってゆくとはいえ、発生的には、あきらかに大人の女たちの子守り唄であった。

それにたいして、守り子唄の登場はやや遅れ、十八世紀後半を待たなければならぬ。たとえば、明和九（一七七二）年に刊行された民謡集『山家鳥虫歌』さんかちようちゅうかには、こんな志摩地方の子守り唄が収められている。

勤めしようとも子守はいやよ

お主しゅにや叱しかられ子にやせがまれて

あい
な
間に無き名を立てらるる

奉公としての子守りが、ここにははつきり姿を現わしている。子守りの勤めはいやなものだ、主人には叱られ、背に負う子にはいじめられ、いわれのない噂を立てられる、そう歌うのは、たぶん、まだ女中奉公のできない年若い少女である。この子守り娘らの嘆き節はそのままだに、明治以降の、数も知れぬネエヤたちが口ずさんだ守り子唄へと、地続きにつながっている。

こんな守り子唄があつた、奉公するとも守奉公はいやぞ、主にや叱られ、子にや泣かれ、人には楽なよに思われて（高知）——。十八世紀の志摩の守り子唄は、いかなる経路を縫つてか、この土佐の守り子唄のなかに流れ込んでいた。守り子唄の伝わってゆく道は見えにくい。たいてい、それは地中深くに横たわる水脈を辿り、ある土地から別の土地へとさだめなく流離してゆく。

いずれであれ、すくなくとも十八世紀後半には、子守りを労働として専門的になう守り子の群れが現われ、守り子唄もまた歌われはじめていたことは確認される。子守り奉公と、守り子唄の誕生はおそらく、この十八世紀後半という時期を大きく遡ることはないだろう。^{さかのぼ}